



【住 所】愛知県半田市東洋町2-29

【病 院 長】中根 藤七 先生

【病 床 数】500床

【スタッフ】医師8名、看護師14名(他科と兼務)、内視鏡技師6名

【内視鏡検査・治療総数】(平成20年度) 上部消化管内視鏡検査 3,306件、下部消化管内視鏡検査 1,671件、ERCP 240件(うち胆道処置 161件)、ESD 48件、内視鏡的止血術 153件、EIS 16件、内視鏡的乳頭切除術 51件、超音波内視鏡検査(上部 86件、胆膵 71件)、胃瘻造設 70件

【内視鏡関連機器】上部用内視鏡4本、下部用内視鏡5本、十二指腸用内視鏡2本、高解像度ハイビジョン内視鏡システム4台、NBI4台、上部用拡大内視鏡2本、下部用拡大内視鏡1本、経鼻内視鏡1本、上部用超音波内視鏡2本

地域最大の基幹病院として 高度な救急医療と最先端の内視鏡診療を提供

地域唯一の救命救急センターとして 24時間体制で緊急の内視鏡治療を提供

半田市立半田病院は、愛知県名古屋市の南に位置し、2つの離島を含む人口約60万の知多半島医療圏で最大の基幹病院です。平成17年2月には、中部新国際空港『セントレア』の開港に伴い、県下で12番目の救命救急センターとしての指定を受けました。現在では知多半島医療圏で唯一の救命救急センターを有する急性期病院として、心疾患や脳疾患などの高度医療を含むほぼ全ての救急疾患に24時間対応しています。

消化器内科でも、消化管出血に対する内視鏡的止血術や、ERBD等の緊急胆道ドレナージ、肝臓癌破裂による腹腔内出血に対する肝動脈塞栓術(TAE)などを24時間体制で行っており、同科で統括部

長を務める大塚泰郎先生を筆頭に、医師8名、看護師14名、内視鏡技師6名が当番制で救急診療に対応しています。同科部長の神岡諭郎先生は、「放射線科と内視鏡室を兼務する経験豊富な看護師に常時待機してもらっているので、緊急時であっても安全で確実な内視鏡処置が迅速に行えます」とお話になり、医師とスタッフの連携の良さが伺えました。

内視鏡洗浄の履歴管理も含めた 徹底した感染対策を実践

同院は平成21年6月に病院機能評価Ver.5を取得し、現在Ver.6の取得に向けて準備を進めています。Ver.5取得の際に、内視鏡室では①フタルール製剤を用いたスコープの症例間消毒をガイドラインに則って全例で実施、②生検鉗子・スネア・局注針・ガイドワイヤー等の内視鏡処置具のデスポーザブル化、③マスク・ゴーグル・エプロン・手袋等の着用と検査前後の手洗い徹底によるスタッフの感染防護対策などを実施しました。早くから内視鏡洗浄の履歴管理にも取り組んでおり、洗浄履歴が記録される機能を有した洗浄機を導入し、徹底した感染管理を実践しています。平成18年には内視鏡室を改装し、内視鏡関連手技の効率性と内視鏡の洗浄・消毒の機能性を向上させるため、院内のレイアウトを見直して変更を加えたそうです。



消化器内科 統括部長
大塚 泰郎 先生



消化器内科 部長
神岡 諭郎 先生

● 患者利益を追求した医療の提供を目指し最先端の設備と技術を備える

患者様の利益になる医療サービスの充実を目指し、消化器内科では最新の機器や治療法を積極的に取り入れています。高解像度ハイビジョン内視鏡システムやNBIシステム、拡大内視鏡などを完備し、より低侵襲で質の高い検査や治療を実践しています。また、平成20年にはカプセル内視鏡を導入し、スクリーニングの実施とその後の積極治療が同科の大きな特色となっています。導入後1年が経過した現在では、名古屋大学医学部附属病院の内視鏡センターと連携し、カプセル内視鏡の安全性と有効性を確立するために偶発症の対策や対処法を構築しているそうです。神岡先生は、「これまで外科でし

か治療できなかった消化器関連の検査や治療も、現在では内視鏡を介してより低侵襲に行えるようになってきました。今後は手技の安全性の確立と共に、ますます内視鏡による治療の範囲が拡大されていくと予想されます。そういったニーズの拡大に十分対応するためにも、内視鏡医のスキルアップと技術の平均化が重要になってきます」とお話になりました。これらを実現するため、同科では月に一度若手臨床医を対象としたトレーニングを実施し、大腸内視鏡モデルを活用してスコープ挿入のテクニック等を習得してらっているそうです。



消化器内科のみなさん

医学の三三三編
●「小腸カプセル内視鏡、その後」
消化器内科 医師 大塚 泰郎

小腸カプセル内視鏡検査は平成19年10月1日より保険適用となりました。この検査を当院で導入して約一年が経過しましたのでその結果について述べていきます。

どんな場合に受けられるか?
この検査の適応症例は上消化管（胃・十二指腸）の検査（内視鏡検査）をしても原因不明の消化管出血を伴う小腸疾患の診断に限られています。また、消化管に閉塞や狭窄が存在または疑われる患者さまや、心臓にペースメーカーや除細動器を埋め込んでいる患者さまは検査を受けることが出来ません。

患者さまの傾向
脳梗塞・心筋梗塞の治療のための抗血小板薬（バイアスピリンなど）や、痛経などに痛み止め（ロキソニンなど）を内服している方が多い傾向にあります。

最近、こうした抗血小板薬や痛み止めが消化管の粘膜障害を引き起こすことが注目されています。このような薬を常用している慢性的な出血が原因で、その原因がはっきりしない患者さまのなかには、小腸カプセル内視鏡検査で小腸に異常が見つかる方もいらっしゃるかも知れません。

半田病院における状況
当院では平成20年1月から導入し12名の患者さまがこの検査を受けられました。その内訳は53歳から77歳（平均68歳）で、男性4名・女性8名です。

小腸の憩室・小腸のびらん（ただれ）・小腸の血管拡張はそれぞれ3例ずつ、小腸潰瘍は2例に発見されました。

そのうち2例ではカプセル内視鏡検査時に活動性の出血があり、名古屋大学医学部附属病院消化器内科へ、特殊な内視鏡（ダブルバルーン小腸内視鏡）を用いての治療を依頼しました。偶然小腸にリープが見つかった症例もありました。異常所見の無い症例は1例のみでした。

消化器内科で使用しているカプセル内視鏡の説明資料